従軍行

乾隆帝

三辺の烽火軍営を照らす
十万の丁男夜兵を練る
但腰間に宝剣を懸けしめば
丈夫何れの処か名を成さざらん

【作者】乾隆帝（一七一一～一七九九年）・清の第六代皇帝。姓は愛新覚羅。名は弘暦。廟号は高宗。雍正帝の第四子。康熙帝・雍正帝に続く最盛期の皇帝。外征を行い、西域を国土化した外、チベットにまで大清帝国の版図を広げた。この詩は、その情景に基づいて士気を鼓舞したもの。

【語釈】＊従軍行…出征兵士や戦場のさまを詠う漢楽府の篇名　＊三辺…延綏、寧夏、甘粛の三つの国境守備地域　＊烽火…のろし火。＊丁男…成人した男子。一人前の男。壮丁。　＊練兵…兵士を訓練をすること。　＊腰間…こしのあたり。

【通釈】三辺（延綏、寧夏、甘粛）の辺疆ののろし火が陣営を照らし。十万の兵卒が夜に訓練をしている。ただ、こしに下げた立派な剣さえありさえすれば男児たるもの、名をなさないわけがない。